《平成30年》

環境保全米栽培こよみ（全品種共通）

環境保全米生産基準

1. 農水省が定める『特別栽培農産物表示ガイドライン』に準拠した栽培
（農薬成分回数８以下、化学合成窒素１０ａ当たり３．５kg以下）
2. 栽培基準で指定した肥料・農薬で栽培
3. 栽培計画書・栽培管理記録簿の記帳、GAP（農業生産工程管理）の実践
4. 栽培契約締結と生産圃場の登録（生産者⇔JA）
5. 生産玄米は全量JAへ出荷

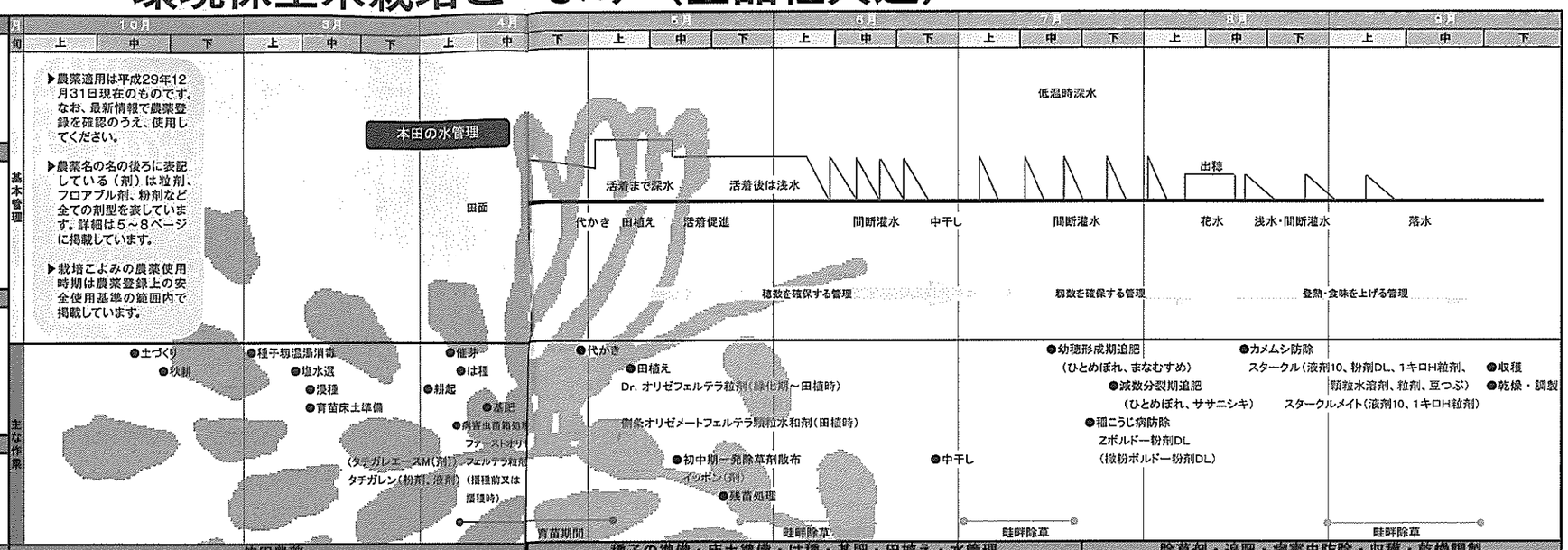
環境保全米重点実施事項

1. 平成30年産環境保全米作付目標面積3,700haの達成
2. 有機質資源を活用した高品質・良食味米づくり（環境保全米の安定生産）
3. 生産基盤となる農地の確保と地域環境の保全
4. 農薬・化学肥料を削減した栽培による消費者への安全・安心の提供
5. 施肥体系の見直し等生産コスト削減にむけた取組み
6. 資源の再利用、農薬残液の適正処理と農薬の河川流出防止対策の徹底
7. 区分管理、区分販売による取引先との結びつき強化（産地指定率の向上）

高品質・良質米生産のポイント

1. 堆肥や土づくり肥料を投入し地力の維持・増進を図る
2. 適正施肥、病害虫防除（いもち病・カメムシなど）、きめ細かな水管理を徹底する
3. 適品種を選定 → 大豆あとではまなむすめの作付け
4. 適期は種・適期田植え（晩期栽培への取組み）
→ 障害型冷害の被害軽減、高温登熟の回避、収穫期の分散
5. 適期落水・適期刈取り → 品質低下の防止（白未熟、充実不足、胴割、穂発芽、着色粒）の防止
6. 適正な乾燥調製 → 胴割れ粒、肌ずれ粒、砕粒、籾混入による品質低下の防止

調製目標	食味目標値（測定器ケットAN-700）
1. 玄米水分：14．5～15．0%	1. 食味値：70以上
2. 整粒歩合：80%以上	2. 玄米タンパク含量：6．3%以下
3. 調製網目：1．9mm	3. アミロース：15～20%



土づくり・施肥体系

１．土づくり

1）耕深目標：15cm

2）たい肥の施用

➢土づくりには稲わらたい肥や牛ふんたい肥を10a当たり0.5㌧～1.0㌧を目安に投入する。

➢たい肥は秋耕時にすき込む。（完熟たい肥は春耕時でもよい）
（稲作栽培マニュアル、土壌タイプ別たい肥施用量の目安を参照）

3）稲わらのすき込み

➢秋耕2回、春耕1回の3回耕起を目標として、稲わらの分解促進に努める。
必要あれば稲わらすき込みと同時に腐熟促進資材ワラ分解キング」10kg/10a
を施用する。

4）土づくり肥料の施用　10a当たり

資材	元気田みやぎ	粒状ようりんケイカル13号	粒状ケイカル
保証成分（%）	リン酸：2 ケイ酸：34 苦土：2 アルカリ：35	リン酸：4 ケイ酸：27 苦土：5 アルカリ：44	ケイ酸：31 苦土：2 アルカリ：38
施用量	60kg／10a	140kg／10a	120kg／10a
施用時期	春施用	秋施用又は春施用	秋施用又は春施用

２．施肥体系（JAいしのまき推奨）　10a当たり

用途	使用資材	現物施用量	施肥窒素	化学合成窒素
育苗	**合成培土L** ※製品1kg当たりの無機態窒素は0.7g ※10a当たり20箱使用（1箱当たり培土3kg換算） ※肥料入り山土、育苗専用肥料等の使用も可	60kg	0.042kg	**0.042kg**
	クミアイ液肥2号 ※肥料成分：N10%-P4%-K8% ※1箱当たり50倍液500cc灌注×20箱	200cc	0.02kg	**0.02kg**
基肥	**いしのまき有機248** ※肥料成分：N12%-P14%-K8% (N12%→うち無機態6.0%、有機態6.0%)	40kg（最大）	4.80kg	**2.40kg**
追肥	**NK化成C68号** ※肥料成分：N16%-K18% (N16%→うち無機態16%)	6kg（最大）	0.96kg	**0.96kg**
		合計	5.822kg	**3.422kg**

➢堆肥等の投入により地力のある圃場では一般化成肥料（肥料に農薬の成分が含まれているものは除く）を使用した施肥体系としても構わない。ただし、この場合も化学合成窒素の施用量は栽培期間中を通して10a当たり3.5kg以内とする。

➢肥料入り山土、合成培土は成分量が記載されているものを購入先より必ず入手して保管する。

使用農薬

３．環境保全米使用農薬

対象病害虫	農薬名	使用時期	使用量	成分	備考
種子消毒	**温湯消毒**			0	
殺菌剤（育苗）	タチガレエースM粉剤	は種前		2	いずれか1剤
	タチガレン粉剤	は種前		1	
	タチガレエースM液剤	は種時及び発芽後		2	
	タチガレン液剤	は種時又は発芽後		1	
	カスミン粒剤	は種前 覆土前		0	節減対象外農薬
殺虫殺菌剤（箱処理剤）	ファーストオリゼフェルテラ粒剤	は種前		2	
	Dr. オリゼフェルテラ粒剤	は種時（覆土前） 緑化期～移植当日			
殺虫殺菌剤（田植同時創条施用）	側条オリゼメートフェルテラ顆粒水和剤	移植時	各病害虫に対する使用量は、同一剤でも異なるので、5～8ページを参考に、必ずラベルで確認してから使用する。	2	
除草剤	イッポン1キロH粒剤75	移植直後～ノビエ2.5葉期（ただし、移植後30日まで）		3	いずれか1剤
	イッポンフロアブル	移植時に散布機で田植同時処理可			
	イッポンジャンボ	移植直後～ノビエ2.5葉期（ただし、移植後30日まで）			
殺菌剤（本田）	バリダシン液剤	収穫14日前まで		0	節減対象外農薬
	バリダシン液剤5				
	バリダシン粉剤DL				
	バリダシンエアー				
	カスミン液剤	穂揃期まで			
	Zボルドー粉剤DL	出穂10日前まで			
	撒粉ボルドー粉剤DL				
殺虫剤（本田）	スタークル液剤10	収穫7日前まで		1	いずれか1剤
	スタークルメイト液剤10				
	スタークル粉剤DL				
	スタークル1キロH粒剤				
	スタークルメイト1キロH粒剤				
	スタークル粒剤				
	スタークル豆つぶ				
			農薬成分回数合計	8	

➢タチガレエース（剤）はタチガレエースM（剤）に変更となったので、在庫等のタチガレエース（剤）はラベルの有効期限を確認したうえで使用する。

➢いもち病は必ずDr.オリゼ（ファーストオリゼ）フェルテラ粒剤、側条オリゼメートフェルテラ顆粒水和剤で防除する。

➢節減対象外農薬は、農薬成分回数にはカウントされないが、使用した場合は栽培履歴簿へ必ず記帳する。

➢農薬の使用にあたっては、ラベルで有効期限、使用時期等を確認して下さい。

種子の準備・床土準備・は種・基肥・田植え・水管理

４．種子の準備

➢全量種子更新。温湯消毒。

➢塩水選の実施。（比重：うるち1．13 もち1．08）

➢浸種積算水温はササニシキ100～110℃、ひとめぼれ・まなむすめ120℃～130℃。

➢浸種中は2日に1回の水交換と種子籾袋の上下の反転を行う。

➢催芽温度は28℃～30℃。1mm程度のハト胸催芽。

５．床土準備

➢床土のpHは4．5～5．5。

➢育苗床土・覆土には合成培土や高温殺菌された山土を使用する。（苗立枯病予防）

➢タチガレエースM粉剤又はタチガレン粉剤を育苗箱土壌混和。
（タチガレエースM粉剤又はタチガレン粉剤を使用した場合は液剤は使用できない）

➢ファーストオリゼフェルテラ粒剤を1箱当たり50g使用する。

６．は種

【稚苗・中苗及び田植日の違いによる播種日めやす…加温出芽の場合】

田植日	稚苗 は種日	稚苗 育苗日数	稚苗 は種量（乾籾g/箱）	中苗 は種日	中苗 育苗日数	中苗 は種量（乾籾g/箱）
5月5日	4月10～15日	20～25日	160～180	—	—	—
5月10日	4月15～20日			4月5～10日	30～35日	100
5月15日	4月23～28日	17～21日		4月10～15日		
5月20日	5月2～4日	16～19日	140	—	—	—
5月25日	5月9～11日	14～16日		—	—	—

（注）無加温出芽の場合は育苗日数を3～5日程度多くみる。

７．畦畔

➢2．施肥体系（JAいしのまき推奨）、化学合成窒素早見表（13～14ページ）参照。

➢栽培期間中の化学合成窒素施用量は3.5kg/10a（厳守）。 不足する窒素は有機物由来の窒素（有機態窒素）で補う。

８．田植え

➢田植適期・栽植密度のめやす

作型	苗の種類	活着温度	田植適期	栽植密度	植付本数	植付深さ
稚苗	普通	13℃以上	5月5～14日	60株/坪	4～5本/株	2～3cm
	晩期		5月15～25日	70株/坪	3～4本/株	
中苗		14℃以上	5月10～20日	60株/坪	3～4本/株	

・栽植密度：ひとめぼれ、ササニシキは60株／坪、まなむすめは70株／坪とする。
・ブロック転作あと地では50株／坪とし、植付本数は3～4本とする。

➢いもち病、イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ等防除。
Dr.オリゼフェルテラ粒剤を1箱当たり50g散布する。
または、側条オリゼメートフェルテラ顆粒水和剤をペースト肥料に混合し側条施肥田植機で施用する。

９．水管理

➢田植え後活着するまでは4～6cmのやや深水。その後は2～3cmの浅水で活着促進。

➢有効茎数確保後は中干しを実施。（圃場を歩くと足跡がつく程度まで）

➢中干し後は間断灌水。（ブロック転作あと地では飽水管理）
但し、幼穂形成期～減数分裂期の低温時には深水管理とし幼穂を保護。

幼穂形成始期～減数分裂期前 （出穂前25～15日）：水深10cm
減数分裂期 （出穂前15～10日／幼穂長3～12cm）：水深17～20cm

➢出穂・開花期は花水といわれイネが水を多く必要なため水を切らさない。

➢落水時期は出穂30日以降とする。（白未熟粒等による品質低下防止）

除草剤・追肥・病害虫防除・収穫・乾燥調製

１０．除草剤

➢環境保全米で使用できる除草剤はイッポン（剤）を1回のみ。

➢雑草の適用葉齢範囲内で早めに散布。
イッポン（剤）の ノビエに対する適用葉齢は2．5葉期まで。

【除草剤の効果を高めるポイント（37～39ページ参照）
・畦畔の補修補強により漏水を防止。
・ていねいな代かきで圃場の凹凸をなくす。
・十分な水深を確保してから散布。（とくにフロアブル剤、ジャンボ剤）
・多量の降雨が予想される場合は使用は避ける。
・代かきから田植えまでの間隔は極力あけない。
・散布後7日間は落水、かけ流しはしない。

１１．追肥

➢葉色が低下した圃場では要否判定（稲作栽培マニュアルP80～82）に基づき追肥を実施。ただし、栽培期間中の化学合成窒素施用量は3.5kg/10a（厳守）。

➢施肥体系（JAいしのまき推奨）、化学合成窒素早見表（13～14ページ）参照。

１２．稲こうじ病防除

➢常発圃場では撒粉ボルドー粉剤DLを10a当たり3～4kg散布し防除する。

１３．カメムシ防除

➢畦畔、農道の草刈り。（出穂10日前までに終了させる）

➢無人ヘリによる広域一斉防除が最も効果的なので活用する。

➢スタークル粉剤DLで防除する場合は傾穂期（穂揃期の3～4日後頃）を目安に防除する。

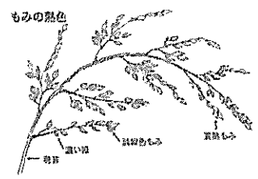
１４．適期刈取り

➢出穂後の積算温度、出穂後日数、籾の黄熟程度から総合的に判断する。

【出穂後の積算温度と出穂後日数の目安】

品種	刈取始期	刈取適期	刈取終期	出穂後日数
ササニシキ	930℃	1,000℃	1,150℃	45～50日
ひとめぼれ	940℃	1,000℃	1,100℃	40～45日
まなむすめ	960℃	1,000℃	1,050℃	40～45日

【籾・枝梗・穂軸の色の目安】
全体から80～90%の籾が黄色となり穂軸が先端から3分の1くらい黄変したとき。



１５．乾燥・調製

➢胴割れ防止のため二段乾燥、低温乾燥で仕上げる。

➢常温まで放冷してから籾すりを行う。（強制放冷は行わない）

➢脱ぷ率は85～90%。（二度摺りは行わない）

➢異品種・異物等混入防止対策を徹底する。（45～50ページ参照）

環境保全米

いしのまき農業協同組合・いしのまき農協稲作部会（資材選定：JAいしのまき　監修：宮城県石巻農業改良普及センター）